

デュルケムにおける宗教と教育

——形式と思想——

高 橋 紀 穂

La religion et l'éducation dans Durkheim——*la forme et la pensée*

Kiho TAKAHASHI

要 約

本稿の目的はデュルケム理論において顕著に現われる形式とそれを選択したデュルケムの思想的背景を明らかにすることにある。

議論は以下の手順でなされる。

最初に、『社会学的方法の規準』から「共変法」および「 $y=f(x)$ 」という関数の形式がデュルケム理論の中心にあることを導き出す。次に、彼の宗教と教育についての研究からそれが「 $[C \in M] \Rightarrow I$ 」という形式へと拡大されていることを述べる。続いてそれらの形式の背後にルヌヴィエとブートゥルーの思想があることを確かめる。さらに、デュルケムがこれらの形式を用いて自身の議論を構築している同時代、彼が選択した形式を凌駕する新たな思潮が生み出されつつあったという事実、他方、彼がそれらにあえて関わりを持とうとしなかったという事実を確認する。最後に、そういった無関心が社会学という学問を強固に位置づけようとした意図の現われである、という考察を導く。

「おわりに」においてこうした議論の視点から、デュルケムの選択と現代社会学についての若干の考察がなされる。

キーワード：デュルケム、形式、宗教、教育

はじめに

デュルケム理論がさまざまな問題を抱えていることは、彼の議論が現代でも有効であることと同じぐらい指摘されている。しかし、本稿の目的は彼の議論が持つ問題点を指摘することでも、彼の議論の現代的有効性を証明することでもない。ここで明らかにすることを目指しているの

は、デュルケムがある「形式」に対して持っていたこだわりと、そのこだわりの理由である。つまり、デュルケムがその「形式」にこだわった理由を明らかにすることにより、社会学がまさに誕生しようとした時、そこにおいて何が必要とされていたかを明確にすることが本稿の課題である。デュルケムの選んだ「形式」とそれへのこだわりは、少なくとも当時フランス社会学において必要とされていた何ものかを明らかにしてくれるであろう。社会学は、今や数え切れないぐらい細かなジャンルに別れている。われわれは、そういった状況において、この学問にとって重要なことが失われているとは思えない。しかし、この学問の誕生時に必要とされたものは何だったのか、といった学史的 연구를なすことは、あまたの下位ジャンルに通底する重要事項に再度強い光を当てることになるはずであり、また、この照射が現代社会学にとって有意義な結果をもたらす、という確信をわれわれは持っている。

論考は、まず、『社会学的方法の規準』（以下『規準』と略記）からその形式を導き出し（第1節）、次に彼の「教育」と「宗教」についての研究にその形式の拡大を見出し（第2節）、そして最後にその形式へのこだわりの理由を説明してゆく（第3節）という手順でなされる。

2節ではデュルケムの「教育」と「宗教」についての議論を取り上げているが、デュルケム理論におけるこの二つの領野にあえて注目した理由とは以下のごとくである。1895年の『規準』の出版前、早くもボルドー時代（1887年から1902年まで）から彼が教育についての講義を行い、1902年以降、ソルボンヌへ招かれてもそれが継続されたことはよく知られている。また、その主眼が「道德教育」、すなわち、キリスト教の宗教原理がもはや通用しなくなった母国フランスへ新たな道德を構築することであったことも周知の事実である。他方、ほぼ同時期（1895年）、彼がロバートソン・スミスを知り、宗教研究を始めたこともデュルケムに詳しい者ならずともよく知っているはずである（Bellah [1973: xlvi]）。したがって、デュルケムの宗教研究と道德教育についての講義はほぼ並行して行われていたと言えるだろう。そして、私見では、問題となる「形式」と「思想」が彼の研究にはっきりと現われているのは、彼がこの二つの領野に関わっている時期である。これが「教育」と「宗教」という二つの領野が本稿で取り上げられた理由である。つまり、デュルケムが取り組んだ他の研究ジャンルに注目するより、この二つの領野に注目したほうが、問題となる「形式」と「思想」を分析することが容易になる、と考えたからである。われわれがこれら二つの領野をとりあげる理由はそれ以上のものではない。したがって、われわれはこの二つの領野に注目しつつ問題となる「形式」と「思想」に言及するが、だからといってこれらの領野の相関関係を扱うことはない。また、「形式」を問題としているとはいっても、その「形式」の「実践への適応」の正否を問うこともないだろう。われわれはあくまでもデュルケムが打ち出した「形式」の操作とその拡大の意味、そしてまたその「形式」を生み出した「思想」背景にのみ焦点を集中することになるだろう。

1 形式

『規準』で明らかにされている「形式」とはいかなるものか。

本節ではまずこれを取りあげよう。

ジャン＝ミシェル・バルトゥロによれば、『規準』におけるデュルケム社会学の主導原理とは「因果律」である⁽¹⁾。彼が注目しているのはデュルケムの以下の言葉である。

「社会学が要求するものは、因果律の原理を社会現象に適用することが承認されること、そのことにつきるのである」(RMS [1895: 233=1978: 262])。

この因果律を確認するためにデュルケムがミルの「共変法」を借用したのはあまりにも有名である。デュルケムにとって、それは「AB 両項の相互関係をもとに実験的推論を働かせ、そして、A と B のあいだの因果関係を決定する」方法である。バルトゥロはそれをさらに簡略化し、「A が B を説明する、あるいは、B は A によって説明される ($A \Rightarrow B$)」と述べ、さらに「 $y = f(x)$ 」と数式化する (Berthelot [1995: 85])。この場合、左辺「y」は「B」の変数であり右辺が「A」の変数である。これらはあまりにも単純な思考のように聞こえる。しかし、科学たらんとしたデュルケム社会学の根底にはこの形式が横たわっているのである。われわれはこのことをバルトゥロの議論をもとにさらに詳細に検討することにしよう。

『規準』においては研究のレヴェルが以下の三つに分けられている。

研究対象	必要とされる系列
I	
ある社会の内部に広く見られ、そして、さまざまな原因によって変化する「社会的潮流」：自殺、離婚等	統計学的系列
II	
諸制度、法的諸規則等ある社会の内部において一様に同一性を持って見られるが、同じ種に属するもう一つの社会では異なっているもの	二つの社会において当の現象がとるさまざまな形式の比較
III	
さまざまな社会種において見られる基礎的諸制度 (家族、宗教、仕事)	当の現象の源初的形態から継続的に現われるさまざまな形式

まず、レヴェル I に注目しよう。そこにおけるデュルケムの説明は次のように要約することができる。

デュルケムは自殺を例にあげる。そして、ここで「じゅうぶん長期間にわたって自殺の増減の描きだすカーブを、地方、階級、農村－都市、性、年齢、身分、等々におうじて自殺の示す諸変

化」と比較することへ向かう (*RMS* [1895: 228=1978: 255])。これにしたがい、なすべきことが以下のように示される。

a) いくつかの固有の要因 (A 1、A 2、A 3) と関わる現象 B (自殺) の諸時系列 (y) を確認する。

b) 各々の時系列のあいだにみられる変化を比較し、それらの変化の差異を画定する。

c) 各々の時系列が示す変化の差異の原因を各々が関わる要因の動きに求める。

ここでは、「 $y=f(x)$ 」の形式が見られるであろう。すなわち、ここでの「x」は A がとる変化を示しているのである。

次に、レベルⅡについても要約を試みよう。

a) さまざまな民族における同じ現象を取りあげ、その後「個々別々に考察された各民族において、おなじ現象がおなじ諸条件に規定されて時間のなかで進化を示すかどうかを看取すること」(*RMS* [1895: 229=1978: 256]) が可能かどうかを確かめること、これである。この議論は次のように言い変えることができる。まず、同じタイプに属してはいるが三つの異なる社会があり、そして次に、各々の社会に同じ現象がみられるとしよう。ここで各々の社会を「1」「2」「3」と、各々の社会の現象を「B 1」「B 2」「B 3」とする。次に、それらの各々の条件を「A 1」「A 2」「A 3」としよう。

そうするとそれらの関係は次のように記述できるのである。すなわち、

$$y_1=f(x_1); y_2=f(x_2); y_3=f(x_3)$$

上記の式の内容を詳述すれば、y (1, 2, 3) は、同種に属する三つの社会「1」「2」「3」における現象 B の——構造的——変化を、そして、x (1, 2, 3) は、それぞれの社会における条件 A の (その社会の性質に依拠する構造的あるいは量的) 変化を示す、ということになる。

b) 「次いで、それらの多様な現象の発達のを相互に比較することができる。たとえば、研究対象となっている事実がそれらさまざまな社会にあって、その発達の頂点に達した時点で示す形態を決定するということが行われよう」(*RMS* [1895: 229=1978: 256])。つまり、各々の社会における現象 B の変化 y_1 、 y_2 、 y_3 の中で、それぞれの現象の頂点を一つ一つ取り出す。そして、これを形態 b 1、b 2、b 3 と表すとする。

c) 「このようにして新しい一連の諸変化があたえられてくるわけであるが、これを、同時点でそれらの国の各々において、こうであるに違いないと推定される条件の示す諸変化と比較するのである」(*RMS* [1895: 229=1978: 256])。つまり、一方で、b 1、b 2、b 3 はそれら自身のあ

いだで相互に比較されることができ、他方では、同時点で推定されるそれらの諸条件 A、つまり、a 1、a 2、a 3 の状態にも関連付けられる。

各々個性を持つ社会における b 1、b 2、b 3 において差異があり、そして、それらの差異が厳密に a 1、a 2、a 3 の差異に対応していると確証されると、そこから、 $b=f(a)$ という関係が導かれるであろう。そして、さらに諸変化の総合的系列を把握した後は、以下の関係が導かれるであろう。すなわち、

$$[y(1, 2, 3)=f(x\ 1, 2, 3)] \Rightarrow [A \Rightarrow B]$$

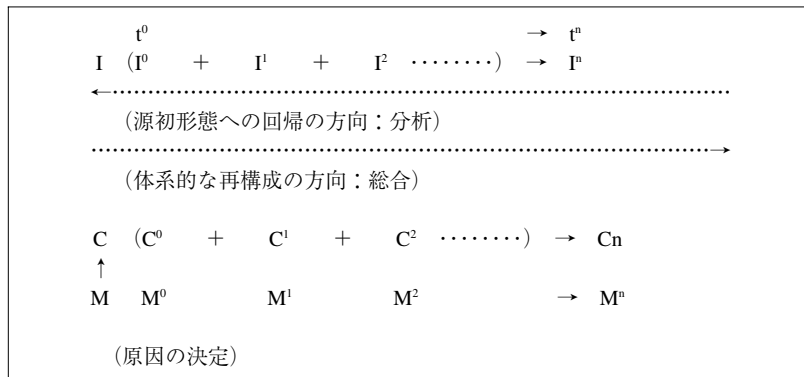
こうして、社会 1、2、3 における現象 B の変化 y は、当の諸社会の現象 A の変化 x に帰属していると、そしてまた、A が B の原因であるとされるのである。

最後に、表のⅢのレヴェルを見てみよう。

ここでは、さまざまな社会種において現われる広範囲の制度を対象にしている。ここにおいてデュルケムは「発生的方法」という名の手続きを示す。そして、この手続きによって、「それらの制度を構成している単純な要素」が指摘され、次に、それらの成長過程が明らかになるとされる。

「発生的とよんでもよいこの方法は、当の現象の分析と総合を同時的に行なうことになる。なぜなら、それは、一方で、現象を構成する諸要素を、たがいにあいついで附加されていく諸要素を示すだけで、分離したかたちでわれわれに提示してくれようし、同時に、広範な比較の分野のおかげで、それらの要素の形成と結合を規定している諸条件をきわめて適切に決定しうる状態にあるからである」(RMS [1895: 230=1978: 258])。

まず、制度を I としよう。次に、時点 t^0 から時点 t^n のあいだで変化する、I の最初の形態から始まる連続的な成長形式を I^0 、 I^1 、 I^2 、 $I^3 \cdots$ としよう。さらに、I を説明する社会条件を C、そして、それぞれの時点に応じる C を、 C^0 、 C^1 、 C^2 、 \cdots とする。最後に、社会環境を M としよう。これは M^0 、 M^1 、 M^2 、 $M^3 \cdots$ と、時点 t^0 から t^n に至るまで複雑化し、それにより社会はあるタイプから別のタイプへと移行する。ベルトウロはこれを次のように図式化する。



次に、バルトゥロはこれらを以下のように数式化する。

$$[C \in M] \Rightarrow I$$

同時に、バルトゥロはここにも共変法の実験的パラダイムを見出し、次のように言う。

「環境 M は、社会の基底を構成している。そして、そこには、制度 I の社会条件 C が含まれている。 I と C のあいだにある因果的な帰属性についてのつながりは、 I の分解と再構成をもとにえられる諸変化と、同様の操作で明らかにされる C の諸変化とを比較することにより確証される。

ここから、歴史が諸変化の基本的な源泉として位置づけられていることがわかる。その位置づけ [statut] は、「存在論的」ではなく（デュルケムにおいて歴史理論は存在しない。そして、コントの社会学にある歴史論的局面を、彼が嫌悪していることは周知の事実である）、論理学的かつ方法論的次元に属している。ここでは、実験的推論の拡大と制度の歴史的な原因研究の原理を理解でき、同時に、社会科学における歴史学と自然科学における顕微鏡とのあいだには類似性があるという原理もまた理解できるのである」（Berthelot [1995 : 86]）。

つまり、デュルケムは、ここにおいて「 $A \Rightarrow B$ 」あるいは「 $y=f(x)$ 」の思考を「 $[C \in M] \Rightarrow I$ 」へと変形、あるいは拡大しているのである。

われわれはこの変形された形式に注目しなければならない。なぜなら、デュルケムは「宗教」と「教育」に対して、この形式を適応して社会学的研究を試みるからである。そしてまた、これらの研究こそがデュルケム理論に緊張を与えるからである。

2 宗教と教育

ここからはデュルケムの「宗教」と「教育」についての具体的研究を見てみよう。まず、いかにして「教育」機関である学校が発展したのかの議論を検討してみよう。

それは、『フランス教育思想史（以下『教育』と略記）』（Durkheim [1938=1981]）の二章と三章で述べられている。

デュルケムの説明の概略をできる限り単純化して述べておこう。

- ①ローマ帝国末期、社会は壊滅的な状況にあった。
- ②ここにおいて、文化を統一する唯一の権力をもっていたのは教会であった。そこでは教養のない人々に対して単純で彼らが理解できる説教を行なうことができた。
- ③その説教においては聖書の言葉を伝えねばならない。しかしそれを正確に伝えるには教育を行なわねばならない。
- ④こうして、教会学校と修道院が誕生し始める。

このような説明は以下のように形式化できる。環境 M のある状態（政治の崩壊、社会の変動、急激な他国からの移住、文化的異質性、全体的な不安定）により、一方では、この環境の条件 C （たとえば教会のような制度の存在）が、自身の発展を保証するために制度 A （学校）を生み出した、と。ここに見られるのは、明らかに「 $[C \in M] \Rightarrow A$ 」という形式である⁽²⁾。

続いて、「宗教」についての説明を見てみよう。

『宗教生活の源初形態』（以下、『宗教』と略記）において、デュルケムは「トーテム信仰」に注目する。そして、以下のように述べる。

「トーテミズムはまったく若干の範疇の人および物に内在しているなかば神的な原理の観念によって支配され、また動物や植物の形態で思考されているのであるから、この宗教を解釈することとは、本質的には、この信念を解釈することである。それは、どのようにして人々がこの観念を構成するに至ったか、またどんな材料でこれを構成したかを探究することである」（FEVR [1912: 293=1991: 上 371]）

解答をできる限り簡略化してみよう。

- ①トーテム信仰において、さまざまな対象やシンボルの表象を介して表現される力とは、克蘭自身以外の何ものでもない。つまり、宗教的信仰を生じさせているのは社会である。
- ②聖と俗という二つの世界と二つの現実の観念を生み出すのは、儀礼的に沸騰状態をみちびく儀式に際し集団により体験される高揚、熱狂、トランス状態などの強い感情の体験である。
- ③くわえて、宗教的信仰は一つの「理想化」から生じるとされる（FEVR [1912: 602=1991: 下 332]）。そして、その「理想化」には、上記の沸騰状態から生じる例外的な心理的そして感情

的体験が必要とされる。

これらの議論もまた、以下のように形式化できる。

社会環境 M のある状態（集団の集合、成員により少なくとも定期的にはなされる集中）が、儀礼や儀式を可能にする。次に、儀礼や儀式は激しい集合感情の経験—— C ——の担い手である。さらに、この C は、 M が理想化され、変形されトーテムという表象—— A ——が生み出される。これらは「 $[C \in M] \Rightarrow A$ 」という形式にあらわすことができる。

両者の議論に「 $[C \in M] \Rightarrow A$ 」という形式が明確に現われている。これらの議論を批判するのは現代では簡単であろう。たとえば、「学校」は社会（環境） M に属しているのだから、そうである限り、この形式は入れ子状態の自己言及システムとなっているのではないかと批判することは可能である。確かにデュルケムはこの形式に「時間」を導入してはいる。つまり「歴史」を。現在では「学校」は確かに環境 M に属するものであるかもしれないが、それはかつてはそうではなく教会であった、という説明である。バルトゥロはこの「歴史」を「論理的な次元」に属すと呼んでいる。そして、このことによって自己言及システムは回避される。それは論理的に要請された「歴史」と言えるかもしれない。つまり、バルトゥロが言うようにデュルケムはこの「時間」を「諸変化の基本的な源泉」としたのである。すなわち「 $[C \in M] \Rightarrow A$ 」という形式の「 \Rightarrow 」は時間の経過を含んでおり、その時間の中で社会は「学校」や「理想」を育てていくということである（しかし「学校」を要請するものはなんだろうか。また「理想」とはどこからくるのだろうか）。しかし、これらの議論が一種の循環論におちいつていることは否めない。宗教現象についていえば、「社会」を成り立たしめているトーテム＝制度が「社会」に由来する、というのは循環論である。この議論は閉じた円環を形作ってしまう⁽³⁾。

このことはデュルケムの教育理論の中にも見られる。デュルケムにとって、教育とは「社会化」である⁽⁴⁾。そして、それは何よりも道德化である⁽⁵⁾。社会の道德力が落ちると社会は病むであろう⁽⁶⁾。それゆえ、社会を維持、発展させるには道德力が必要である。しかし、道德力とはどこから来るか、と問えば、デュルケムの議論によれば、それは「社会」に由来する、ということになるだろう⁽⁷⁾。ここにもまた循環論がある。では、道德力を強化したい時、その力、つまり「理想」はどこからやって来るのか、と問うた時、デュルケムの理論の内部では答えることができない⁽⁸⁾。しかし、こういった批判は本稿の主題には関係していないことは明らかである。われわれの主題とはデュルケムの「 $[C \in M] \Rightarrow A$ 」という形式へのこだわりである。なぜ彼がこの形式にこだわったのか、そしてまた、いかにしてこの形式にこだわるようになったのか、ここからはこれらの問題に答えねばならない。

3 形式と思想

前節でデュルケムの「教育」と「宗教」における「 $A \Rightarrow B$ 」、「 $y=f(x)$ 」、「 $[C \in M] \Rightarrow A$ 」の形

式を見てきた。ここで、われわれは少し立ちどまり、デュルケムがこの形式で何をなそうとしているのかを考えてみよう。つまり、こういった形式を操作して彼がなそうとしていることの意味を考えてみよう。その答えははっきりしている。それは「実験的推論 [raisonnement expérimental]」の証明である。

「実験的推論」とはよく知られた用語であるが、簡単に言えば、それは次のような操作と言うことになるだろう。

まず、物理学のように、社会学は実験室で諸現象を再生産することはできない。次に、社会学は、この時代の生理学者や心理学者のように、ある要素を様々な諸要因の働きに従属させて、ある諸現象からまた別の諸現象を引き起こすこともできない。したがって「本来的な意味での実験」(RMS [1895: 217=1978: 239])は社会学には不可能であるゆえ、残されているのは「間接的な実験」(RMS [1895: 217=1978: 239])を施行することだけである。これは、研究される諸現象の変化の体系的比較の上に基礎づけられる——こういったことが、実験的推論の骨子だとするならば、先に見てきた形式はこの「実験的推論」を証明する手立てとして選ばれたと言える。

前提にある、社会現象を分析するには自然科学の方法論は通用しない、という思考はデュルケムの先達、すなわち、コント、ミル、リアール、ルヌヴィエ、ブートゥルー等も認めるところであった⁽⁹⁾。そこでデュルケムは「実験的推論」へと到達したのであるが、これが科学性の希求から導かれたことは間違いない⁽¹⁰⁾。一方、科学性とは客観性であり証明可能性である。デュルケムにとって、証明可能な「推論」こそが科学的理論を構成する⁽¹¹⁾。そしてこれらを充たすものが「実験的推論」と「共変法」なのであった。後者が証明可能性を構築する方法であることをデュルケムは師である、ルヌヴィエとブートゥルーから引き継いだ⁽¹²⁾。

ルヌヴィエは「共変法」について以下のように述べている。

「それは単純な帰納法以上のよりよいものである。そして、これこそが物理現象の法則を確立させる一般法則である。これにより、共在的かつ継続的な諸現象のあいだにある因果関係についての、しばしば、あいまいで不明瞭な研究が乗り越えられる。原因であろうとなかろうと、結果であろうとなかろうと、問題はある現象が別の現象に依拠する方法とその程度を、あるいは、ある現象が別の現象の数値に応じた数値をとる方法とその程度を決定することである。ここで依拠されている一般的なモデルが、実際、われわれの自然についての認識を明らかにする。とりわけ、そこでの問題領域と十分に進歩した探究のレベルが、計測と計算を可能にしている。論理学者には、まだ、ほとんど知られていないが、原因の思考に代えて関数の思考 [idée de fonction] を用いることは、近代物理学に特徴的なものである」(Renouvier [1875: Chap. XXXV, 25])。

一方、ブートゥルーは次のように述べる。

「(1) 数学は完璧に理解可能であり、そして、絶対的な決定論的表われである。(2) 数学は、少なくとも、理論上は、そして、事の本質においては精確に現実に適応している」(Boutroux [1895: 136])。

このようなブートゥルーにとっては、「 $y=f(x)$ 」の形式こそが「科学的法則の特徴そのもの」なのであった(Berthelot [1995: 44 (note 16)])。

デュルケムはこれらの師の思考の影響を受けていることは確かであろう。しかし、それだけで彼のこだわりを説明することは困難である。なぜなら、デュルケムの時代、すでに、科学の分野でも哲学の分野でも大きな変化が起きていたからである。まず、物理学では1900年を前後して量子論と相対性理論が開花しようとしていた。また、同時期には、デュルケムが頼りにした数学はル＝ロワやポワソンの影響によって震撼させられることになっていた。

デュルケムは、それらの運動を感じていたはずである。にもかかわらず、彼は自身が依拠した「合理主義」思想に関わる、数学、論理学、物理学等にさまざまな異議が提出されるこの時期、それらの議論にまったく関与しない。「フランス哲学学会」のメンバーであったはずの彼が「厳密科学や論理学にかかわる会議にはきまって欠席している」(Berthelot [1995: 100])。

なぜ、このように、新たな学術的気風を無視してまで彼は「実験的推論」と「共変法」にこだわったのか。バルトゥロはこの疑問に次のように答える。

「この種の閉鎖性は、しかしながら、彼が定めたプログラムだけでなく、彼がなした挑戦とその閉鎖性をつきあわせてみると、ある意味を持つことがわかる。つまり、実験的推論を社会科学に導入することは、彼が参考にする領域の人々すべてにとって、不可能なこと、さらには、非常識なこととして考えられていたのである。理由や議論はどうあれ、コント、ミル、リヤールそしてブートゥルー等にとっては、それは、いうなれば常軌を逸した企図と映るのである」(Berthelot [1995: 102-103])。

ここでのデュルケムは、彼の目的を阻害するような議論に対し背を向け、門戸を閉ざし、閉ざされた領野の中で「科学」を打ち立てることを決意したかのような態度を固持している。他方、こういった所作は彼に独特のプログラムを打ちたてる道を開いた。バルトゥロはこのデュルケムのプログラムを上記の「決別」にくわえ、「基礎付け、そして、征服」という観点から述べている。『社会学年報 [l'Année sociologique]』は、「基礎付け」と、「征服」(くわえて「集人」)の企図を含み、さらに、その学術的目的とは、次のことであった。

「社会諸科学の不均質で多様な領域を、一つの統一された科学的企図の枠に合わせて変形するこ

とであった。すなわち、重要なことは、学問ジャンルを混ぜ合わせるのではなく、それらを相互的に豊かにすることであった。ただし、そのためには、それらのディシプリンが獲得した経験からなされる協力が、社会的なものについての一つの一般理論ではなく、共通する一つのパラダイムの内部へと厳密に組みこまなければならないのであった。そして、実験的推論こそがそのパラダイムであった」(Berthelot [1995: 103])。

デュルケムはこうして「社会学」を新たなディシプリンとして確立しようとしたのである。一方で、それが「社会学主義」と批判されるまでにいたったことは周知の事実である。しかし、こうしたベルトゥロの説明は、デュルケムが異様なまでに「実験的推論」とその証明法としての「共変法」にこだわったこと理由の一つとして考えることはできるだろう。

おわりに

今、一つの学問を新たに立ち上げたいと望む人がどれだけいるだろうか。あるいはまた、それが可能である、と信じる人がどれだけいるだろうか。デュルケムはそれを信じ実行に移した。そこに大きな困難がつきまとうことは彼も理解していたであろう。ここに彼の勇気を見ることもできるだろう。他方、「科学」を掲げ、「社会学」をその名の下に構築しようとした彼が当の「社会学」の「科学性」に疑いが生じた時、「無視」という形をとったとすればやはりそれは批判されねばならないだろう。『分業論』から『規準』を経由して後期の宗教研究に至るまで、彼の研究には批判がつきものだったが、彼がそれらを真摯に受け止め議論したことはよく知られたところである。しかし、当時生じつつあった「科学性」の議論や証明のための論理学の議論を無視したことは責められるべきであろう。

ただ一つ言えるのは、デュルケムが、「科学」には分析方法が必要であり、そして、そこから提起された議論には客観性を持った証明が必要である、という信念を持っていたということである。この科学者としての態度はいつまでも認めなければならない。同時に、証明のために用いた「共変法」の形式がもはや彼の内部でさえ安定して存在していることはないということも認めなければならないだろう。

フランス社会学はデュルケムとモースを介し構造主義人類学を生み出した。しかし、「構造」と同時に「歴史」や「行為」を含んだ社会理論を構築するための分析方法と証明方法を見つけ出すまで社会学理論が進んでいるとは言えないだろう。これらを乗り越える理論を構築することは社会学が取り組むべき課題の一つであると言える。しかし、取り組む対象が何であれ、社会についての「理論」の構築を目指すというのであれば、デュルケムが要請した「科学性」と「論理性」を無視することはできないだろう。

注

- (1) デュルケム社会学における「因果律」の重要性について述べている文献は多いがさし当たっては本稿でも参考にした Alpert [1961=1977] と中 [1979] の二著を参考されたい。また、デュルケムの「因果律」についての思考が最終的には「それを人間学的基础」(Berthelot [1995: 78]) という不可思議な議論へといたるといことも指摘しておこう。すなわち、彼にとって「因果律」とはまず、世界を説明する、という意図の源初段階から存在し、そして次に「宗教」という形態をとって現われ、やがてそれらが「科学」という思考へと至るものである。この思考は「因果律」を追いかける科学である「社会学」を生み出したのもまた「因果律」である、という循環論となっている。
- (2) 一方、環境 M の状態が制度 A を発展させるか消滅させるかを定める。なぜなら、制度 A の発展という事象——仮にこれを現象 B と呼ぼう——はそれが一つの社会化の機能を果たしている以上、B は A にとつてと同様 M にとってはその有用性が重要とされるからである。また、「教育が社会化の機能を果たす」という主張はデュルケムが教育を語るときには常に出される議論である。脚注(4)を参照のこと。
- (3) この種の批判は数々あるがここでは代表的なレヴィ=ストロースのものを挙げておこう。彼は次のように言う。「聖なるものの集会的期限についてのデュルケムの理論は、論点の先取りに依存している。会合および儀式のさいに、そこで現に感ずる感動が儀礼を生み、あるいは存続せしめるのではなくて、儀礼活動が感動を挑発するのである。宗教的観念が『沸騰する社会環境とその沸騰そのもの』(中略) からうまれたどころか、社会環境は宗教的観念を前提としている」(Lévi=Strauss [1962: 102=1970: 116])。
- (4) 「教育とは未成年者の体系的社会化である」(ES [1922: 41=1982: 59])
- (5) 「社会は、新たに生まれてきた利己的、非社会的な存在に対して、社会的、道徳的生活を営みうような、他のもう一つの存在を、もっとも迅速な方法で付加しなければならない。教育の任務はすなわちこれであり、また教育の偉大さも、ここに存するのである」(ES [1922: 93=1982: 128])。
- (6) 「社会の道徳力が眠ったままで、その役割を果たさないとき、道徳力は望ましい方向から逸脱して、病的で、有害な様態を示すにいたる。こうして(中略)社会は、増大した活動に対して、新たな栄養物を補給することが必要になってくる」(EM [1934: 11=1964: ①46])。
- (7) 「宗教力は、人間力であり、道徳力」(FEVR [1912: 599=1991: 下 327])、であり、かつ、その「宗教」は「理想」的な「完全な社会の実現」へと向かう(FEVR [1912: 600=1991: 下 330])と言われる。他方、その「宗教生活の源泉を生み出したのは社会である」(FEVR [1912: 598=1991: 下 327])とも言われている。
- (8) デュルケムは「一つの社会はそれと同時に理想を創造しないでは、みずからを創造することも、再創造することもできない」(FEVR [1912: 603=1991: 下 334])と述べている。しかしこの議論に説得性はあるだろうか。
- (9) 「コント、ミル、リアール、ルヌヴィエ、ブートゥルーなどのデュルケムに影響を与えたあらゆる思想家は、この点では意見を同じくする。つまり、社会学が問題となるとき、自然科学の実験方法に価値はないのである」(Berthelot [1995: 72])。
- (10) 「デュルケムのテキストは、科学性を持つための不可避の原理を位置づけると同時に、その実現のための決定的な形式もまた位置づけている」(Berthelot [1995: 22])。
- (11) デュルケムにとって「根本的な問題は、なされる手続きではなく「ひとつの現象が他のひとつの現象の原因であることを証明する」ことができる条件である」(Berthelot [1995: 79])。
- (12) ベルトゥーロの次の言葉を参照のこと。
「デュルケムがそれほど熱心にマッハを読んでおらず、そして、おそらくゴブロの理論さえも読んでいないにしても、ラランドとブートゥルーの立場がデュルケムを捉えないということはほとんどありえなかっただろう」(Berthelot [1995: 97])。
「デュルケムは、三点においてミルとはっきり区別される。第一に、デュルケムは決して実験的推論の(帰納あるいは演繹という)論理学的基礎づけには言及しない。第二に、彼は、ミルが差異法の代

案そして補助材として考えた、共変法の手続きを特権化し、普遍化する。第三におなじ一つの結果がさまざまな原因から生じるという「結果と、原因の複数性のからみあい」という理論を拒否する。そこで、このようにデュルケムがミルとたもとを分かち原因が、彼のもつ基本的なエピステーメとの関連 [son engagement épistémique fondamentale] で生じているとすれば、次のことを確認することは些細な問題ではなくなる。つまり、重要な企図についての探究心を確固としてもつ思索の師の一人を、彼がここで想起していることを確認すること、である。その師とは、ルヌヴィエである」(Berthelot [1995: 97-98])。

引用・参考文献

(邦訳のある文献の場合、本文中の引用箇所については一部変更したものもある)

- Alpert, H., 1961 *Emile Durkheim and his sociology*, Russell & Russell (=1977 花田綾・仲康・由木義文訳『デュルケムと社会学』、慶應通信)。
- Boutroux, E., 1895 *L'idée de loi naturelle dans la science et la philosophie contemporaines*, Paris, Alcan.
- Bellah, R. N., 1973 *Emile Durkheim on Morality and Society*, University of Chicago Press.
- Berthelot, J=M., 1995 *1895 Durkheim——l'avènement de la sociologie scientifique*, Presses Universitaires du Mirail.
- Durkheim E., 1895 (1988) *Les règles de la méthodologie sociologique* (本文中は RMS と略記), Paris, Flammarion (=1978 (1990) 宮島喬訳、『社会学的方法の規準』岩波文庫)。
- 1897 (1960) *Le suicide*, Paris, Presses Universitaires de France (=1985 宮島喬訳、『自殺論』、岩波文庫)。
- 1912 [1994] *Les formes élémentaires de la vie religieuse* (本文中は FEVR と略記), Presses Universitaires de France (=1991 古野清人訳『宗教生活の原初形態 (上・下)』、岩波文庫)。
- 1922 *Education et sociologie* (本文中は ES と略記), Paul Fauconet (éd.), Paris, Alcan (=1982 佐々木交賢訳、『教育と社会学』、誠信書房)。
- 1934 *L'éducation morale* (本文中は EM と略記), Alcan (=1964 (1979-1980) 麻生誠・山村健訳、『道德教育論 1・2』明治図書出版)。
- 1938 *L'évolution pédagogique en France*, Paris, Alcan (=1981 小関藤一郎訳、『フランス教育思想史』行路社)。
- Lévi-Strauss, C., 1962 *Le totémisme aujourd'hui*, Presses Universitaires de France (=1970 仲沢紀雄訳『今日のトーテミズム』、みすず書房)。
- Renouvier, C., 1861 *Essais de critique générale*, Paris.
- 1875 (1912) *Premier essai : traité de logique générale et de logique formelle*, 2^e éd., Paris.

2008 年 9 月 30 日受理